

「吾輩は猫である」論

— その諷刺と作者の問題 —

松 本 洋 二

「吾輩」の諷刺

この論は、夏目漱石「吾輩は猫である」の諷刺の性格と、その性格をもたらしした原因を考えようとするものである。そのために、まず、語り手である「吾輩」を取り上げよう。

〈三毛子は死ぬ、黒は相手にならず、聊か寂寞の感はあるが、幸ひ人間に知己が出来たので左程退屈とも思はぬ。先達では主人の許へ吾輩の写真を送つて呉れと手紙で依頼した男がある。此間は岡山の名産吉備団子を態々吾輩の名宛で届けて呉れた人がある。段々人間から同情を寄せらるゝに従つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来た様な心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しやう杯と云ふ量見は昨今の所毛頭ない。夫のみか折々は吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい。〉(三)

「一」では、「吾輩」は、「どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活するには人間と戦つて之を剽滅せねばならぬ」とする白君の意見に賛同し、「いくら人間だつて、さういつ

迄も栄へる事もあるまい。」と言っている。このことは、「吾輩」が猫の世界と人間世界とをはつきりと分け、いわば、猫対人間という対立的なとらえ方をしているのだと言えよう。「一」のすべてがその調子で貫かれているのではないにしても、「吾輩」が猫と人間とを対立的にとらえ、人間の世界そのものを相対化することによつて、批判しようとした点は、注目に値する。

ところが、右に引用したように、「三」の最初で、「吾輩」は、きわめて人間に近い立場を取ると表明したのである。そして、「三」以降、人間の世界の観察をする「吾輩」は、「どこ迄も人間になり済まして」(三)、見聞きしたことや、感想を述べていく。「一」で見られた、猫対人間世界のとらえ方は、消えてしまつたのである。

「二」は、まだ「一」を受け継いだ面があつて、「人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが、知恵は却つて猫より劣つて居る様だ。」というところでは、人間一般よりも、むしろ猫を上位に置いて考へている。しかし、「二」はまた、次のような部分をも含んでいるのである。

〈要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜の如く風に吹かれて超然と澄し切つて居る様なものゝ、其実は矢張り娑

婆氣もあり欲気もある。競争の念、勝たう／＼の心は彼等が日常の談笑中にもちら／＼とほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。只其言語動作が普通の半可通の如く、文切り形の厭味を帯びてないのは聊かの取り得でもあらう。

「吾輩」の諷刺が現れているところとして、よく引用される箇所である。もし、最後の一文がなかったとしたら、この部分の諷刺は、かなり鋭い徹底したものだと言えよう。しかし、実際には「吾輩」は、この最後の一文で、苦沙弥や寒月、迷亭の世界を、自ら許容してしまっているのである。したがって、この部分も、さして痛烈な諷刺にはなり得ていない。

「吾輩」は、人間の世界と対立しないことを表明してから、人間一般の批判をすることが少しはあるにせよ、苦沙弥の代弁(注⑧)をしたり、極端な場合には、読心術を使って主人の心理を紹介したりする(九)ような、毒のない傾向が強くなってくる。こうした部分でも、具体的なことがらに対する、「吾輩」の批判・諷刺がないというわけではない。「九」でも、苦沙弥の心理を紹介したあと、「何事によらず彼れは徹底的に考へる脳力のない男である」とか、「何返考へ直しても、何条の経路をとつて進まうとも、遂に『何が何だか分らない』文は慥かである」とか言つて、苦沙弥を諷刺している。しかし、これとても人間そのものを諷刺したものではない。「ことによると社会はみんな氣狂の寄り合かも知れない。」という、苦沙弥の人間社会一般に対する疑問に比べると、「吾輩」の諷刺は、苦沙弥を

ちやかしたような些末なものでしかないのである。むしろ、「一」であれば、「吾輩」がしてもよきそうな見方を、苦沙弥がしているとも言える。そして、その苦沙弥の疑問は、「吾輩」によつて正当に受けとめられたり批判されたりはしなかったのである。

「吾輩」が登場人物の意見の紹介者として活動する傾向は、最終章の「十一」が最も顕著である。ここでは、「自覚心」批判や、自殺クラブの話、結婚消滅論など、一連の近代批判とも言うべき議論が、登場人物の間でやりとりされているが、「吾輩」は、彼らの議論を、批判したり諷刺したりはしない。それどころか、「諸先生の説に従へば人間の運命は自殺に歸するさうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさ／＼して来た。」というように、逆に、苦沙弥たちに影響されてしまふのである。

へ呑氣と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つた様でも独仙君の足は矢張り地面の外は踏まぬ。氣楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨りをやめてとう／＼御園から奥さんを連れて来た。

是が順当だ。然し順当が永く続くと定めし退屈だらう。東風君も今年したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだらう。(十

一)

このあと、三平君や鈴木藤さんについても、同じ調子で「吾輩」は語っていく。ここに見られるのは諷刺ではない。人物を相対化

して見せて、結局はすべて肯定してしまっているのではないだろうか。「主人は早晩胃病で死ぬ。金田のぢいさんは欲でもう死んで居る。」というのも、実業家をさんざん皮肉ってきた作品にしては、余りに悟りすぎたようなことばである。「吾輩」は、人間社会との勝負を避けてしまっている。

「太平は死ななければ得られぬ。」(十二)と言って、「吾輩」は死んでゆくが、「吾輩」は元来「太平」を求めていたのではないはずである。「一」で見せた、人間と対立していく気概は、全く見られなくなっているのである。「吾輩」は、「人間の方へ接近して来た様な心持に」(三)なりすぎて、自分の世界と人間の世界とを対置してとらえることができなくなつたとと言えるだろう。作品の内部を見たとき、このことが、人間の世界に対する、「吾輩」の批判力を弱め、この作品の諷刺を徹底的なものにしなかつた理由であつたと考えられる。

〈二〉「吾輩」と作者漱石

「吾輩は猫である」の諷刺が不徹底なものであることは、桶谷秀昭氏が「『猫』の明暗」^(註②)の中で指摘しているが、氏はその原因について漱石の側に注目し、次のように述べている。

へなせなのか。おそらく漱石には人間を冷酷に凝視するにはあまりに暖い感情が生来の氣質としてあつたからである。彼は人間に悲観することはあつたが絶望はしなかつたと考えることができぬ。

これは、人間漱石に、諷刺の不徹底の原因を求めたものと言えよう。私は、この見方に賛成であるが、ここでは、やや別の角度から、つまり作者漱石に注目することで、漱石のもっていた問題を取り上げたい。

それを考えるのに、もう一度「三」の最初に戻ろう。「吾輩」が「人間から同情を寄せらるゝ」ようになったというのは、「吾輩」の写真を送つてくれと、主人に手紙で依頼してきた人や、「吾輩」あてに吉備団子を送つてくれた人が現れたようなことを指している。「吾輩」の言う主人は、もちろん苦沙弥のことであるが、これは、実は、漱石のもとに、手紙や贈り物が届いたという想定をしなければならぬのである。つまり、漱石が、創作に実際の出来事を、そのまま入れ込んだ形になっているのである。こうした書き方は、すでに「二」の最初で、はっきりと出てきている。

「吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難有い。」

これは、「吾輩は猫である」が、初めて「ホトトギス」(明治三十八年一月)に発表され、かなり評判になつたことを背景にした表現である。ここで考えなければならぬのは、「二」「三」に見られる、こうした創作と現実との混線、いづれも「吾輩は猫である」の人氣を、「吾輩」が肯定的に扱っていると思われる点である。そればかりか、作者漱石自身までもが、それを肯定しているのではないかと考えられるのである。もちろん、「吾輩」は、漱石によつて

創り出された語り手であり、登場人物である。したがって、「吾輩」を、作者漱石が批判的にとらえている可能性がないわけではない。しかし、実際には、次に掲げるような漱石の手紙を読むと、その可能性もほとんどないということがわかる。

「猫伝をほめてくれて難有いほめられると増長して続篇続々猫伝をかくきになる実は作者自身は少々鼻について厭気になつて居る所だ読んでちつとも面白くない陳腐な恋人の顔を見る如く毫も感じが乗らない。」

「然し僕の猫伝もうまいなあ。天下の一品だ。十銭均一位な所にはあたる。」

「君が大々の贅辞を得て猫も急に鼻息が荒くなつた様に見受候。

続篇もかき度(い) 杯と申居候。いづれ四月はホト、ギスが壺百号ださうですから其時迄に椽側で趣向を考へて置くと申す話です。(中略) 皆川さんは倫敦塔の様なものではなくては御氣に入らないかと思つたら吾輩の様なものも分るえらいと猫は大喜悅に御座候。」

これらを読むと、その滑稽な書きぶりの中に、かなり嬉しそうな、また励まされて元氣の出ている漱石の様子がうかがわれる。ことに、最後の手紙では、猫の話を伝えて書く体裁が見られる。「二」「三」の冒頭の裏返しとでも言うべき表現で、現実の中に、実在しない「吾輩」が顔を出している。作者と「吾輩」は親密につながっており、そのどちらもが、「吾輩は猫である」の人氣に肯定的であると考へてよいだろう。

作者の側に眼をやったとき、この点こそが、この作品の諷刺を不徹底なものにした大きな要因だと考えられるのである。「吾輩」は具体的な点で個々の人間を批判しながらも、人間世界と対立しきつていないし、作者はまた、そうした「吾輩」を、突き放してとらえてはいないのである。作者のこうした基本的な姿勢は、「一」を除いて、この作品の底に流れているものだが、その姿勢を生んだ根本的な原因は何であつたのか。三、四を通じて、その問題を考へる。

〈三〉 漱石とスウィフト

「吾輩は猫である」が、滑稽の要素を多く含んでいることは確かだが、基本的には諷刺文学を旨指したものだと思へてよいだろう。「あれは総体が諷刺に候現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に収め候。」という表現も、それを多少裏つけている。また、「スウィフトと厭世文学」と「諷刺物」を見る時、もつとよくそのことがわかる。漱石は、その中で「滑稽物」と「諷刺物」の区別に言及し、「滑稽物」は、「未来において説者が再演してみたくなる傾向」を有し、「諷刺物」には、説者が「被諷刺的地位を避け様とする傾向」がある、と述べている。全体として見た場合、説者が、この作品の登場人物になりたいとは、どうしても考えられない。苦沙弥、迷亭、寒月、東風、三平、独仙などの立場に立ちたくないのが普通だろう。とすれば、この作品は、少なくとも漱石のとらえ方からすれば、諷刺文学であつたということになる。

それでは、この作品の諷刺は、どんなものであつたか、やはりス

ウィフト論を通して考えていこう。

へ諷刺を遣る癖に呑気である、現世に甘んじて居る。しかも諷刺を敢てする位だから幾分か世の中を茶にして居る。(中略) いづれも定業は五十年、浮世は肥桶の様なものだ、臭い々と云つて人を冷かしながら、臭い中に澄まして住んで、至極太平に諷刺を遣つて居る。

へ彼等の不満足な所は、寧ろ他人が自己の如く啓発されて居ないと云ふ点にある。そこで自己が先覚者として是等を矯正してやらうと云ふ微志をも含んで居る位であるからして、其不満足なるものは反つて彼等自身に満足して居る反響とも見られる。

これらは、スウィフトの諷刺に比べ、不徹底な諷刺しか表さない作家を評した、漱石のことばである。ここに示されている作家の姿は、「吾輩は猫である」を書いて居る漱石そのものではあるまいか。

へとにかく二代目小泉にもなれさうもないスエフトにもなれさうもない僕の様な善人をシニツクの様にかくのはよくありませんよ
ねえ君

この手紙は、明治三十七年十二月十九日付のもので、「吾輩は猫である」(「一にあたる部分」)を書いてから、しばらくたった頃のものとして推測される。そうすると、「スエフトにもなれさうがない」というのは、スウィフトのような諷刺はできさうにないと解釈し得

るから、このことばは「吾輩は猫である」の諷刺についての意見だと考えてもよいだろう。

漱石によれば、スウィフトの諷刺は「絶望暗黒なる厭世文学」と変質したものである。スウィフトの諷刺を生み出す「不満足」には、「希望がない、救はれ様がない。免かれ様がない」というのである。つまり、スウィフトの諷刺は、「被諷刺的地位が、人類一般に共通なる普遍性から出て」といふと、漱石は考えている。いわば、絶対的な諷刺である。漱石は、彼を「最強大なる諷刺家の一人」だと思つた。

漱石が、「一」で、「吾輩」を人間と対置させたとき、スウィフトのように、「人類一般に共通なる普遍性」を諷刺の対象にしようとしたのではないだろうか。そして、漱石自身は、その意図が充分達せられず、徹底的な諷刺が生み出せなかったことに気づいていたと思われるのである。それが、右に引用した「スエフトにもなれさうがない」となつて現れたのであろう。

漱石が、スウィフトを意識していたことは、以上のことから言える。ところが、そのスウィフトの名が、「吾輩は猫である」に一度も登場していないのである。西洋人の名前が多いこの作品に、漱石が非常に意識していたスウィフトの名が出てきてもよさうなものである。漱石は、やはりスウィフトばりの諷刺ができないことで、スウィフトを出せなかったのではないか。

漱石とスウィフトについて、もう少し考える。

漱石が、スウィフトの厭世がどこから生じたかを考えるために、その人間像を分析しているところがある。七項目からなる、この興

味深い分析を、簡略に記すと、次のようになるうか。

一、スウィフトは孤児であつて、家庭的に恵まれなかつた。

二、自尊心が強かつた。非常な肝癩持ちで、肝癩を起こすと、結果を顧みず我意を通した。また、人に屈従するのが嫌いで、人に命令したがる傾向が強い。

三、私利私欲にふけるといつた劣等なわがまま者ではない。(善意に自分の財産を使い、また愛国者でもあつた。)

四、真面目な問題でも冗談半分に取り扱う。

五、病気があつた。(当人は胃病だと言つていたが、今では「腦の近傍を冒す一種の病氣」ということになつてゐる。)

六、二人の女性とのもめごとがあつた。

七、文学者であり、同時に政治家であつた。

この七項目のうち、どれが厭世と結びつくのか、漱石にはよくわからなかつたのだが、しつて言えば、病氣が厭世とつながるのかもしれないと述べている。ここでは、その結論よりも、この七項目と漱石の共通点を考えなければならぬだろう。七について、漱石は、「彼はいやに政治的である。貴族的である。『今少し平民的に社会的方面から筆を執つて貰ひたい様な心持がする。』と述べて、批判的である。また、六の女性関係や、(一)を付した部分は留保しておくとして、それにもかかわらず、漱石の描くスウィフト像は、漱石に相当していると言えよう。漱石がスウィフトを意識したのは、彼自身がスウィフトとの類似に気づいてゐたからだろう。博識を惜し

みなく披瀝したかのような「吾輩は猫である」に、スウィフトの名前が出てこないのは、スウィフトの諷刺に及ばなかつたという、漱石の氣持ちが働いてゐたからではあるまいか。

それでは、漱石は、なぜ人間一般に対する諷刺を、徹底して貫かなかつたのか。この点を、今度は、漱石の創作意識の面からとらえ、明らかにしたい。

〈四〉 漱石の創作意欲

既に^(二)で述べたように、漱石は、「吾輩は猫である」の好評に、氣をよくくしていたものと思われる。

へまた斯くまで世間の評判を受けようとは少しも思つて居りませんでした。最初虚子君から「何か書いて呉れ」と頼まれて、あれを一回書いてやりました。丁度其頃文章会といふのがあつて、「猫」の原稿をその会へ出しますと、それを其席で寒川鼠骨君が朗読したさうですが、多分朗読の仕方でも旨かつたのでせう、甚く其席で喝采を博したさうです。それで愈々「ホトトギス」に出して見ると、一回には世間の反響は無論なかつたのです。只小山内薫君が「七人」^(註)で新手の謠物だとか云つてはめてくれたのを記憶してゐます。

ここにあるように、確かに、漱石は前もつて「吾輩は猫である」の好評を予想してはゐなかつただろう。しかし、漱石が、作品の評判を氣にしていることも確かである。^(二)で引用した手紙にも、漱石

のそのような気持が現れている。これは、漱石がかなりの自負をもつて、「吾輩は猫である」の創作をしたことを示しているだろう。「文体なども人を真似るのがいやだつたから、あんな風によつて見たに過ぎない。」^(注⑧)という、一見さらっとした言い方からも、創作に対する、漱石の意欲、自負をうかがい知ることが出来る。

「吾輩は猫である」について、「たゞ偶然あゝいふものが出来たので、私はさういふ時機に達して居たといふまでである。」^(注⑨)という漱石のことはを誤解して、この作品に対する漱石の意欲込みを軽視してはならない。虚子の勧めがなかったら、この作品は生まれなかつたかもしれない。そういう意味で「偶然」と考えてもよい。しかし、それよりも、「さういふ時機に達して居た」という意味で、「偶然」を理解すべきではないか。「吾輩は猫である」の成立は、虚子の勧めという外的条件も無視することができないが、「たゞ書きたいから書き、作りたいから作つたまで」という創作意欲の面に重点を置いて考えるべきだろう。

この時期の漱石の創作意欲は、「吾輩は猫である」に限らない。明治三十七年、漱石は多くの水彩画を描く一方で、新体詩、俳休詩、「吾輩は猫である」、「倫敦塔」、「カーライル博物館」などの創作をしているが、それらの作品の多様さに注目すべきである。「従軍行」(新体詩)、「富寺」(俳休詩)、「吾輩は猫である」、「倫敦塔」(カーライル博物館)「短編小説」と並べてみると、漱石が創作面で幅広い試みをしていることがわかる。

明治三十六年、大学での講義に嫌気のさしていた漱石は、^(注⑩)明治三十七年になつて、創作の公表を増していった。

〈余が身辺の状況にして変化せざる限りは、余の神経衰弱と狂気とは命のあらん程永続すべし。永続する以上は幾多の「猫」と、幾多の「濠虚集」と、幾多の「鶉籠」を出版するの希望を有するが爲めに、余は長しへに此神経衰弱と狂気の余を見棄てざるを祈念す。〉

たゞ此神経衰弱と狂気とは否応なく余を駆つて創作の方面に向はしむるが故に、向後此「文学論」の如き学理的閑文字を弄するの余裕を与へざるに至るやも計りがたし。〉

これは、「文学論」の序の一部である。^(注⑪)イギリス留学中及び帰国後、周閑の者から「神経衰弱」「狂気」と評された漱石が、それを逆手に取つて述べたものであるが、ここでは、「神経衰弱」「狂気」が、漱石を創作へ導いていくという点が重要である。漱石に内攻していた「不愉快」^(注⑫)が、周閑の者に「神経衰弱」「狂気」といった印象を与えたのであろう。その「不愉快」は、創作の場を得て開放されていったのである。

イギリスにおいては、「余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。」^(注⑬)という状態であり、帰国後は、大学の講義に嫌気がさして大学をやめたいと言つた。そうした「不愉快」の背景には、自分の価値を何とかして充分に発揮しなければならぬとする、一種義務感のような気持があつたと思われるのである。

〈私は此世に生れた以上何かしなければならぬ、と云つて何をし

て好いか少しも見当が付かない。^(注⑧)

「信用がなければ、世の中へ立つた処で何も出来ないから、先づ人の信用を得なければならぬ。信用を得るには何うしても勉強する必要がある。」^(注⑨)

「もと／＼私には何をしなければならぬといふことがなかつた。勿論生きて居るから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確実にし、此処に個人があるといふことを他にも知らせねばならぬ位の了見は、常人と同じ様に持つてゐたかも知れぬ。」^(注⑩)

漱石には、最初から、社会の中で自己の力量を發揮しようという強い欲求があつた。何がしたいかという前に、「何かしなければならぬ」という思いが先行してゐたのである。こうした観念的な上昇指向は、具体的には、「英文学を研究して英文で大文学を書かう」^(注⑪) というものであつたり、また、「十年計画にて企てられたる大事業」^(注⑫) という文学論の完成であつたりした。それが、三十七年の創作を転回点として、^(注⑬) 創作が漱石の目標となり、三十九年には、文学論を「学理的閑文字」と言うに至るのである。「文学論」の講義の不人気に加え、漱石自身大学の講義に意味を感じられなかつたからであろう。いずれにせよ、漱石の「何かしなければならぬ」という気持ちには、自己の力を傾注したものが、世に認められなければすまないという思いが伴つてゐたと考えられる。「信用を得る」や、「此処に個人があるといふことを他にも知らせねばならぬ」という表現からも、漱石の功名心が読みとられよう。

「吾輩は猫である」を最初に書いた時期、漱石は、「倫敦塔」に

ついても、「ものになりませぬ御一覽の上是非ほめて下さい」「出来上つたあとから読んで見ると面白くも何ともない」「君がほめて呉れたので倫敦塔が急にうまくなつた心持ちがする」と述べており、作品の評価を相当に気にしている。これを、漱石の野心と言つても言いすぎではあるまい。この時期、「不愉快」な漱石が必要だつたのは、何よりも世俗的な意味での成功だつたのではなからうか。

「猫の爲めに名を博した主人は幸福な男に可有之候」^(注⑭)

ここで言う幸福は、漱石の幸福である。「吾輩は猫である」の成功は、漱石にとって、何よりも励ましとなつたに違いない。それを踏み台として、本格的な創作の試みが、以後展開されていったのである。この作品は、まことに、漱石の一生を左右した重要なものであつた。漱石が、自分の第一作を「猫」だらう」と言うのも、うなずける。

このように、重大な意味をもたらした「吾輩は猫である」だが、この作品の諷刺の甘さ、不徹底な点は、つまるところ、これまで述べた漱石の野心、功名心から生じていると考えられるのである。イギリス留学中及び帰国後、漱石は自分の力を思うように發揮することができず、社会の中に自分が確かに位置づいていないと考え、惨めな気持ちであつた。世の中で何かをしなければならぬという上昇指向が、強ければ強いほど、その気持ちも深刻なものであつたはずだ。漱石は「吾輩は猫である」を書いたとき、まだ、社会の中の自分の位置を求めていた。そこが、有力な政治家として活躍していたスウィフトと違つていた。漱石は、少なくとも主観的には、教

師生活に落ち着いていることができなかった。漱石は、この作品を単なる余技として書いたのではない。彼は、自分の「不愉快」な状態を打ち破るために、創作に向かったのである。創作がうまくいかなければ、ますます「不愉快」にならざるを得なかっただろう。漱石は、それだけの自負を抱いていたと言えるし、また、背水の陣を敷いた気持ちでもあっただろう。「吾輩」の批判する苦沙弥たちの「娑婆氣」「欲氣」は、それを書いた漱石自身のものであった。

漱石が、人間社会一般に対する諷刺をすることができなかったのは、彼自身が、当時社会の中での自分の位置を確認しようとしていたからだと考えられる。彼は、教師生活をしながら、きわめて不安定な心理状態であった。それが、創作に対する野心を強いものにしたのであろう。「スワフトにもなれさうにない」というのは、自分自身の功名心に気づいた漱石の残念な気持ちが、現れたものとして、読むことができるのである。しかし、諷刺の徹底を犠牲にしても、漱石には創作上の成功を求めざるを得ない意欲があったのである。

この意欲を、野心、功名心と述べてきたが、これは利己主義の意味合いで使ったのではない。漱石の野心、功名心は、社会における啓蒙家としてのそれである。小説を「一種の勧善懲悪」としてとらえ、「唯自分の良心にはつかしからぬ様に勧善懲悪をやりたい。」「此見識は深く考へ、深く修め、深く読み、又深く寓して出来るものだから、文学者、殊に此種の小説家は頭脳の修養を怠つてはならんと思ひます。」^(注⑫)と言つた漱石のことばから、利己的な野心など感じることはできない。むしろ、啓蒙家としての自負が、ここにはあるだろう。「吾輩は猫である」の諷刺の不徹底は、文学を通じて人生の教

師たらんとした漱石を生み出すための、宿命的なものであったのかもしれない。

注

① 重松泰雄「猫」の視覚——「吾輩は猫である」論（『国文学』昭51・11）

② 例えば、「人間は生意気な様でも矢張り、どこか抜けて居る。」（十）

③ 「もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。」（十）

④ 『夏目漱石論』（昭47）所収

⑤ 同前47ページ

⑥ 明治三十八年一月一日野間真綱宛書簡

⑦ 明治三十八年二月十三日寺田寅彦宛書簡

⑧ 明治三十八年二月十三日皆川正禧宛書簡

⑨ 明治三十九年八月七日畔柳都太郎宛書簡

⑩ 『文学評論』第四編

⑪ この手紙は野間真綱に宛てたもの。「吾輩は猫である」（二）は、十一月下旬か十二月初めに書かれたとされる。（集英社『漱石文学全集』別巻昭49）

⑫ 『文学評論』第四編。以下、漱石のスイフトについての言及もこれによる。

⑬ 談話「文学談」（『文芸界』明39・9）

⑭ 談話「処女作追懐談」（『文章世界』明41・9）

- ⑮ 同前
- ⑯ 同前
- ⑰ 「舊等学校ハスキダ大学ハヤメル積ダ」(明治三十六年六月十四日菅虎雄宛書簡)「僕大学ヲヤメル積テ学長ノ所ヘ行ツテ」(明治三十六年七月三日菅虎雄宛書簡)
- ⑱ 明治三十九年十一月
- ⑲ 「文学論」序
- ⑳ 同前
- ㉑ 「私の個人主義」(「輔仁公雜誌」大4・3)
- ㉒ 談話「落第」(「中学文芸」明39・6)
- ㉓ 前掲「処女作追懐談」
- ㉔ 前掲「落第」
- ㉕ 「文学論」序
- ㉖ 同前
- ㉗ この部分三つとも野間真綱宛の書簡より引用。(それぞれ、明治三十八年十二月十九日、同二十日、翌三十九年一月十九日)
- ㉘ 明治三十八年十二月二十六日内田貢宛書簡
- ㉙ 前掲「処女作追懐談」
- ㉚ 前掲「文学論」

(広島市立基町高等学校教諭)